

令和五年度史学科データ一覧

人事異動

退職 吉原 紗希 副手（令和五年一〇月三十一日）

令和五年度史学科学生在籍者数

学部生	一年生 一五〇名、二年生 一四四名
三年生	一三三名、四年生 一四一名
合計	五六八名
大学院生(M)	一年生 五名、二年生 六名
合計	一一一名
大学院生(D)	一年生 三名、二年生 〇名、三年生 三名
合計	六名

編集部より

同窓会会報は現在、ホームページでの閲覧を基本とします。
URLは左記の通りです。

○近況通信を募集しております。ご寄稿を希望される会員の方は、本会報一ページ目記載の住所へご寄稿ください。なお、字数は二〇〇字以内でお願いいたします。

○住所変更等された場合は、本会報一ページ目記載の住所へご連絡下さい。なお、お電話での依頼は、事務局体制の事情により、恐れ入りますが遠慮いただきます。

〈編集後記〉

本号は諸般の事情で、四頁に短縮して、学科主任の「史学科左見右見」、土屋先生ご寄稿の森ありさ先生の追悼文のみを掲載することになりました。次号から通常の構成に復帰いたします。

史学科同窓会ホームページURL
<http://www.nu-hist-d.jp>

日本大学文理学部

史学科同窓会

會報

第九号

（通号八六号）

令和六年三月三十一日発行

〒一五六―八五五〇

東京都世田谷区桜上水三一―二五―四〇

日本大学文理学部史学研究室内

℡〇三―五三二七―九二二八

史学科左見右見

学科主任 平野 卓治

近年、六十六歳を「緑寿（緑々寿）」として祝いする、という考え方が提唱されているそうです。桜上水の地において、文理学部が成立したのは、昭和三十三年（一九五八）でしたから、現体制の史学科も、次年度でまさに「緑寿」を迎えることになります。

思えば、文理学部史学科の六十代前半は、試験の時期でした。

令和二年（二〇二〇）には、新型コロナウイルス感染症の流行が始まって、感染予防のために、授業は原則としてオンライン形式で実施されることになりました。史学科同窓会にも、コロナ流行の影響は及び、毎年三月にアルカディア市ヶ谷で開催してきた総会・懇親会を令和三年（二〇二二）から見合わせてきました。史学会の大会も、やはりオンライン形式による開催を余儀無くされました。

それでも、令和四年（二〇二二）から対面授業が再開され、文理学

部の構内は、コロナ流行前の賑わいを取り戻していきました。その一方で、二年にわたるオンライン授業を経験したことで、対面を介さずとも、教育・研究をおこなう方法の模索も進みました。対面授業の再開後も、オンラインを併用したハイブリッド形式をとっている教員もいます。コロナ流行を境として、大学における教育・研究のあり方は、新たなステージに入ろうとしているのかもしれない。

また、「MUSE コロナ」の進展とともに、イベント開催も順次解禁に向かい、過ぎる令和六年（二〇二四）三月二日には、三年ぶりに同窓会を開催することができました。さらに史学会についても、令和五年六月から、大会の対面開催を再開させています。

ところで、コロナ流行とはまた別の文理学部構内の変化として、第二体育館が令和四年度に解体され、新たに「サクラスポーツ&ジムスナティックスセンター」がオープンしたことがあげられます。

かつての第二体育館は、一階と地下に食堂が入っており、昼食や喫茶に利用されていた卒業生の方も多いと思います。対面授業が再開し、学生がキャンパスにもどってきた中でどうなることかと危ぶまれましたが、現在は、三号館のカフェテリア秋桜が引き続き学生・教職員の胃袋を満たす役割を担うとともに、本館・二号館・三号館でお弁当が販売されています。さらに日替わりでキッチンカーが入構し、様々な料理を提供しています。お昼時に、学生や教職員がキッチンカーに列をなしている光景は、文理学部の新しい風物詩といえましょう。

このように、「MUSE コロナ」に適応した新しい態勢が定着しよう

している中で、今年度の秋に森ありさ先生が他界されました。控えめなお人柄ながら、的確な御判断と御指摘に幾度も救われてきたことを振り返り、痛惜の念に堪えません。森先生のご貢献を継承して、学科の発展に励んでいかねばならないと決意しております。

その一方で、昨年度に定年退職された関幸彦先生に代わり、新たな日本中世史の先生が次年度に着任されます。考えてみると、文理学部史学科の六十代前半とは、平成三十年（二〇一八）度に私（文化財）と小川雄先生（日本史）、令和元年（二〇一九）度に伊藤雅之先生（西洋史）、令和三年（二〇二二）度に武井紀子先生（日本史）・福島恵先生（東洋史）といったように、コロナ流行という試練に先行して、新しい教員を相次いで迎えた時期に入っていました。

最初に述べたように、次年度で文理学部史学科は、六十代後半に入る「緑寿」を迎えます。この節目にあたって、学部生や院生の皆様によりよい学修と研究の環境を提供できる態勢を整えていくべく、教員・スタッフで努力を重ねていきたいと思います。

訃報

史学科教授 森ありさ先生は、令和五年十一月十五日、逝去されました。哀悼の意を表し、謹んでお知らせ申します。（享年六十歳）

上述のように森先生のご専門はアイルランド史で、ご着任後の文理学部史学科の西洋史のスタッフは坂口明先生（古代ローマ史）、土屋（近代ロシア史）、森先生の体制となった。この三名に、法学部の長沼宗昭先生、馬淵彰先生にもご協力いただいて、日大の西洋史スタッフが引き受けた最大の催し物が二〇一一年五月に二日間にわたって開催された日本西洋史学会の第六十一回大会であった。大会二か月前の三月十一日に東日本大震災が発生して大会の開催自体が危ぶまれる中で、記念講演二名、個別報告は古代史部会九本、中世史部会五本、近世・近代史部会八本、近代史部会は四部構成で二十四本、現代史部会四本、そして小シンポジウム三件という大規模な大会を運営したのである。大きな余震が発生したらどう対応するかなど、考えるべきことも多くあったが、森先生は中心的なスタッフとして講演者や個別報告の司会者の依頼などの準備に携わるとともに、実働の大学院生などを取りまとめて大会を成功に導いてくださった。実働部隊の院生や学生たちが良く働いてくれたのは、森先生が気さくなお人柄で彼らとの間の良好な関係を築いてくださったからであった。

先生は西洋史のゼミの中で最も多くの学生を指導され、学生たちからも慕われていた。ゼミの卒業生や在学生たちも、さぞやそのご逝去を悼んでいることだと思われる。森先生の史学科への多大な貢献に感謝申し上げるとともに、そのご冥福を心からお祈りしたい。

教員近況

森ありさ先生のご逝去を悼む

土屋好古（史学科教授 近代ロシア史）

森ありさ先生が、二〇二三（令和五）年十一月十五日にお亡くなりになった。享年六十の若さであった。このような若さで旅立たれたこと、まことにいたましく残念としか言いようがない。

森先生は、学習院大学文学部、同大学院を経て、二〇〇二（平成十四）年四月に文理学部史学科の助教授に着任された。遅塚忠躬先生の後任であった。大学院博士課程在学中には、アイルランド政府給費留学生としてユニヴァーシティ・カレッジ・ダブリンに留学されている。ご専門はアイルランド近現代史で、近年はさらに研究テーマを大英帝国における第一次世界大戦のコンメモレーション（記念）事業などに拡げておられた。手元にある日本大学史学関係者名簿では旧職員が専任教員と非常勤教員の区別がなされていないので百パーセント確かだとは言えないが、恐らく森先生は史学科の最初の女性専任教員であった。文理学部全体を見回してもまだ今ほど女性教員の数が多いわけではない時代で、男性が圧倒的に多い職場で過ごしにくいこともあったのではないかと推察するが、先生はそのようなことはおくびにも出さず、いつも笑顔をたたえて軽やかに職務を遂行なさっていた。これには先生がお酒が大変お好きで、かつ強く、酒席でも男性にひけをとることがなかったことが与っていたかもしれない。



サクラスポーツ&ジムスナティックセンター（新体育館）